

平成 30 年度 大阪府中学生チャレンジテスト

結果と分析（東大阪市）

平成 31 年 1 月 10 日（木）に実施された「大阪府中学生チャレンジテスト」について、東大阪市の結果及び分析を公表します。

●調査結果について●

本調査で得られる結果は学力の特定の一部であることや、平均正答率のみでは生徒の学力については測ることができないことを踏まえ、本調査から得られたデータをもとに学校・家庭・地域が学力に関する課題を共有し、さらなる連携を深め、生徒の学力向上に取り組むことを目的として分析を行った。

●調査目的● （大阪府教育委員会作成の実施要領より）

- ①大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒の課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、大阪府教育委員会は、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- ②市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組みを通じて、学力向上のための PDCA サイクルを確立する。
- ③学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- ④生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

●調査概要●

実 施 日	平成 31 年 1 月 10 日（木）
実施対象学年	中学校 1 年生 及び 2 年生
実 施 教 科	中学校 1 年生：国語・数学・英語 中学校 2 年生：国語・社会・数学・理科・英語
調査実施生徒数	中学校 1 年生 国語：3275 人 数学：3280 人 英語：3285 人 中学校 2 年生 国語：3480 人 社会 A：3426 人 社会 B：67 人 数学：3480 人 理科 A：2110 人 理科 B：1387 人 英語：3482 人

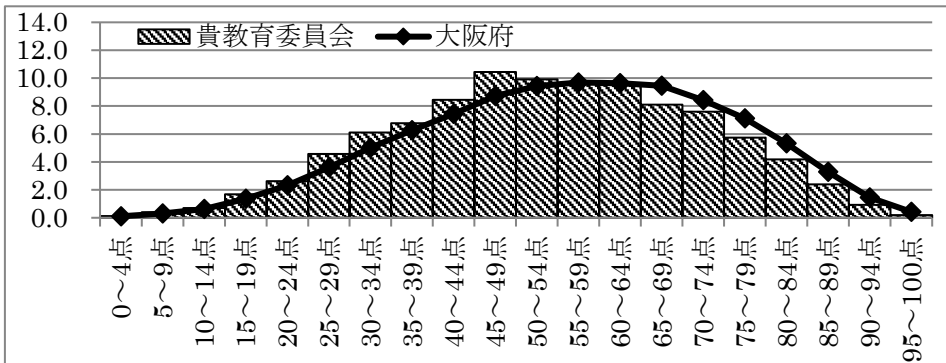
第1学年 国語

■平均得点

53.6 点（東大阪市）

56.2 点（大阪府）

■得点別分布の割合

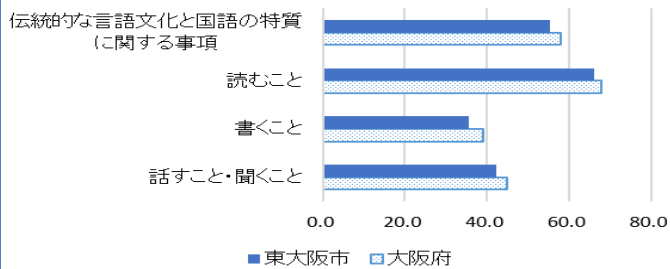


・45～49点をピークとするやや右寄りの山型となっている。

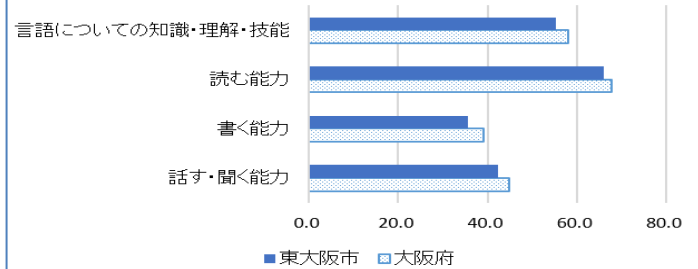
・府の分布と比較して、65点以上の生徒数の割合が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率

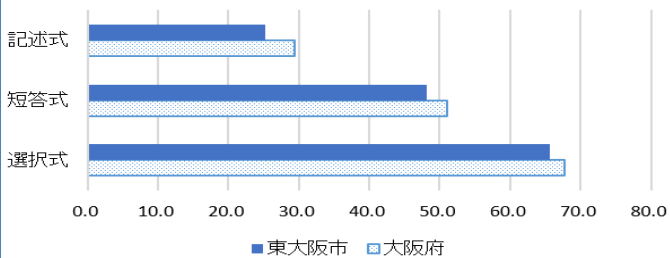
学習指導要領の領域等



評価の観点



問題形式



学習指導要領の領域別の得点率では、「読むこと」の得点率が高いが、「書くこと」の得点率は低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「文脈に即して漢字を正しく読む（閉幕・採決・勢い）」問題では、正答率が大阪府平均と比べて約2.0%低くなっていたが、正しく書く問題となると、「3①オウフク：正答率44.2%（大阪府50.5%）」「3②セイゾウ：正答率41.8%（大阪府47.1%）」と、差が大きくなっている。日々の授業の中で、文字の正しい書き取りや、文脈に即した正しい表現の仕方について、意識して取り組むことが大切である。
- ・「文を読み返し、文意を変えずに正しく書き直す」設問では、正答率が22.3%となっており、大阪府平均の27.5%と比べると、5.2%の差があり、文中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くことに課題があることがわかる。授業の中では、書いた文章を読み返す習慣をつけるようにし、様々な学習場面で意識をすることができるようにすることが大切である。

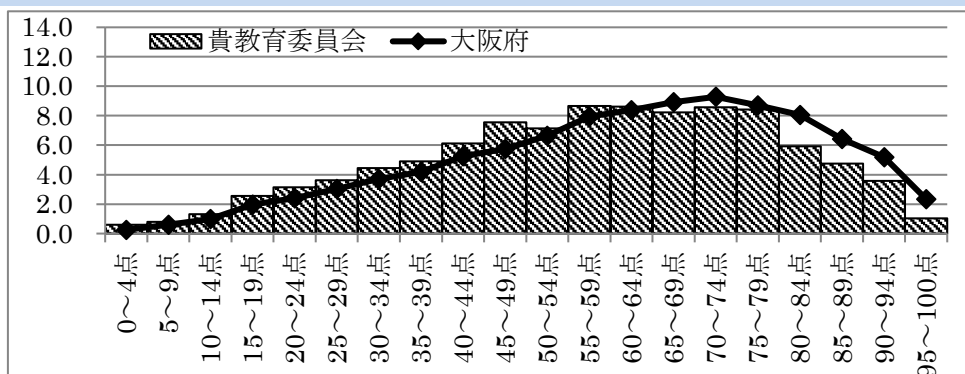
第1学年 数学

■平均得点

57.2 点（東大阪市）

61.3 点（大阪府）

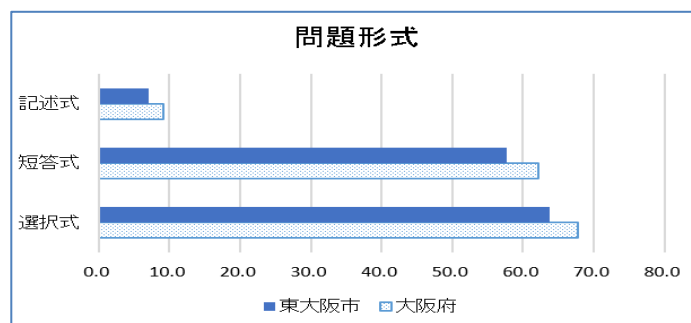
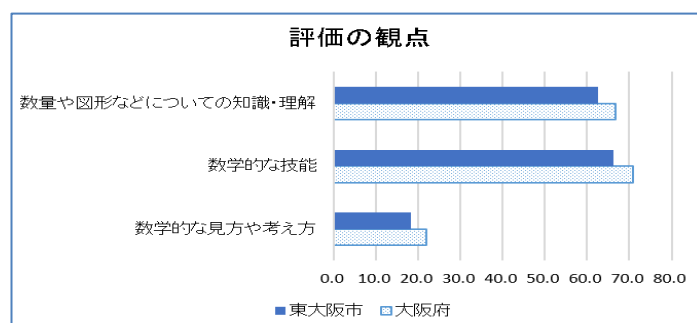
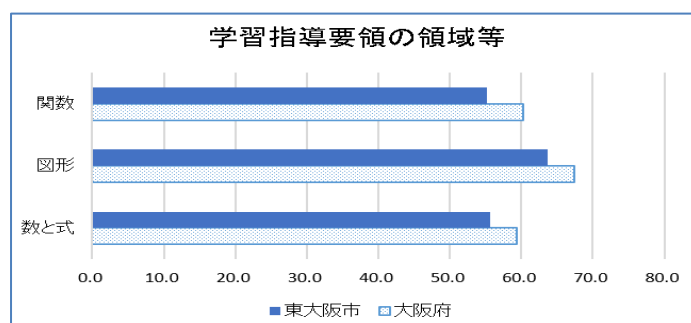
■得点別分布の割合



・55～79 点を中心とした右よりの山型の分布となっている。

・府の分布と比較して、80 点以上の生徒の割合が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、「数量や図形などについての知識理解」や「数学的な技能」に比べ、「数学的な見方や考え方」の得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「 $4x-7-3(2-x)$ を計算する」設問は、全設問中で、大阪府との正答率の開きが最も大きかった（【市】43.3%【府】51.8%）。簡単な一次式の加法と減法の計算ができるかどうかを問う設問であり、以降の学習の基礎となる力である。誤りのある計算を示し、正しい計算の仕方を確認する活動を取り入れるなど、確実な定着を図る工夫がより一層求められる。
- ・「具体的な事象を数学的に解釈し、グラフと対応させて読み取り、数量の関係を説明することができるかどうか」を問う設問は、全設問中で大阪府との無答率の開きが最も大きかった（【市】37.9%【府】29.9%）。数学的な表現を用いて自分の考えを説明できるようになるには、問題解決の方法や手順を説明する場面を設定し、式、表、グラフなどの「用いるもの」とその「用い方」について明らかにする学習活動が有効である。

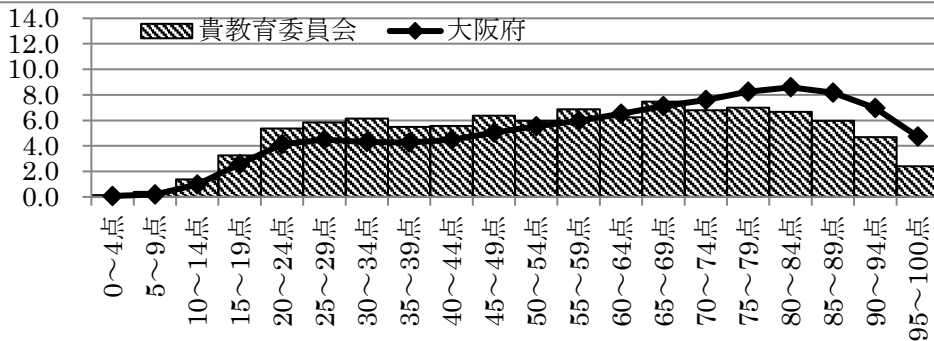
第1学年 英語

■平均得点

56.3 点（東大阪市）

62.0 点（大阪府）

■得点別分布の割合

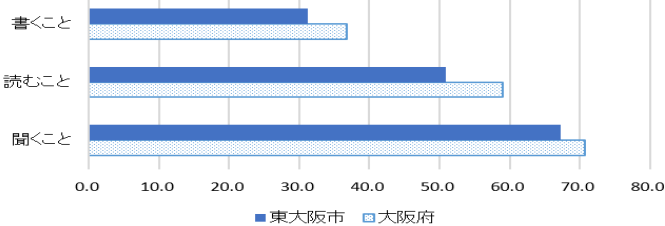


・ 65～69点の分布が一番多い。

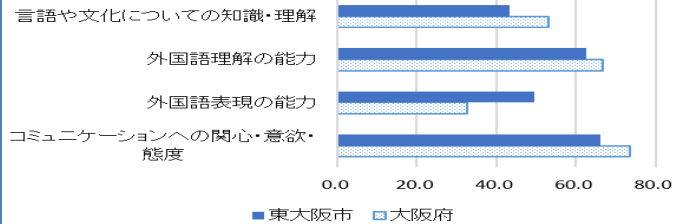
・ 府の分布と比較して、70点以上の生徒の割合が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率

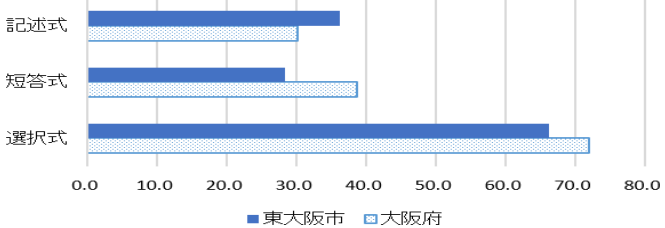
学習指導要領の領域



評価の観点



問題形式



評価の観点別の得点率では、「外国語表現の能力」において、大阪府平均を上回っている。また、問題形式別の得点率では、「記述式」において、大阪府平均を上回っている。

■特徴的な傾向と対策

・ 会話を読み、空欄に適切な語を書く（breakfast）問題において、府平均正答率 53.3% に対して市平均正答率が 31.5% と平均正答率の差が最も大きい。語彙指導の際、必ず Form- Meaning -Use の 3 つの視点を持って指導していかなければならない。特に USE の視点を持って語彙指導を行うべきである。この単語がどのような文脈の中でどのように使うか意識しながら「使える英語」を意識しながら学習しなければならない。

・ 会話を読み、空欄に適切な語を書く（season）問題の無解答率が高く、大阪府平均と比べ差が大きい（【市】36.2% 【府】21.8%）。4 技能 5 領域での学習がもとめられているが、語彙力はそれらの全ての技能を支える土台となる重要な力である。受容語彙から発信語彙へと自分の語彙サイズを増やしていく学習が必要である。

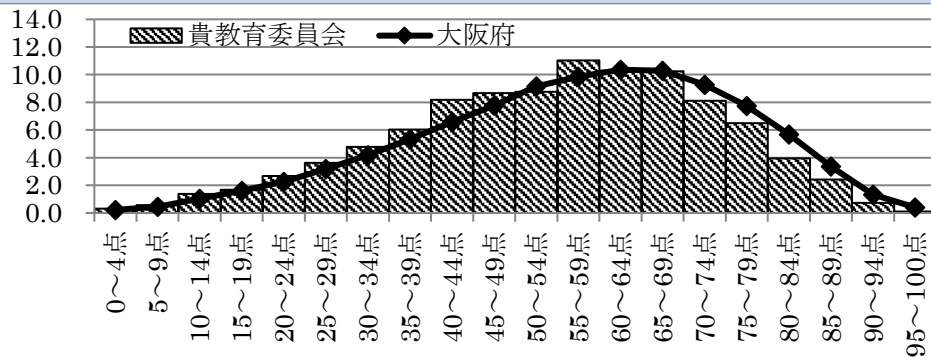
第2学年 国語

■平均得点

54.4 点（東大阪市）

57.0 点（大阪府）

■得点別分布の割合

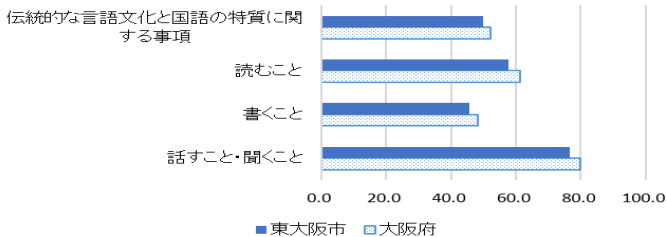


・55～59点をピークとする右寄りの山型となっている。

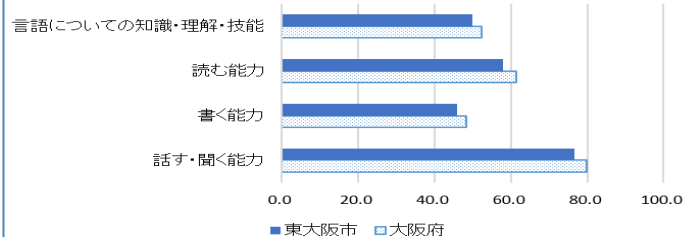
・府の分布と比較して、70点以上の生徒数の割合がやや少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率

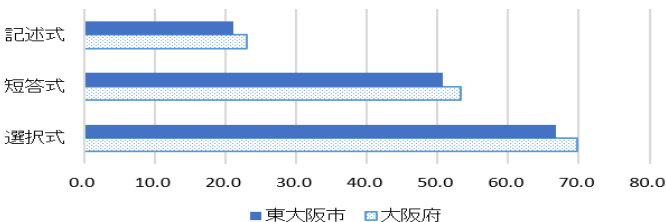
学習指導要領の領域等



評価の観点



問題形式



学習指導要領の領域別の得点率では、「話すこと・聞くこと」の得点率が高いが、「書くこと」の得点率は低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「文脈に即して漢字を正しく書く」設問では、「3①ドクソウ（独創）」では、正答率20.8%と、大阪府平均の28.4%に比べて課題が見られたが、「3②シュウカン（週刊）」では、正答率54.2%（大阪府平均50.8%）、「3③マネイテ（招いて）」では、正答率67.6%（大阪府平均63.8%）と、大阪府平均を上回っている。引き続き、日々の授業の中で漢字の正しい書き取り等の取組みを継続していく必要がある。
- ・「事実や事柄が相手に効果的に伝わるように説明を加えて書く」設問では、資料をもとに事柄の因果関係を説明することが求められており、正答率は2.3%（大阪府平均2.9%）と、全ての設問の中で一番低くなっている。授業改善のポイントとしては、複雑な事柄を分解して捉えなおしたり、順序立てて再整理したり、必要な語句（キーワード）を見つけたりしながら読むことが大切である。

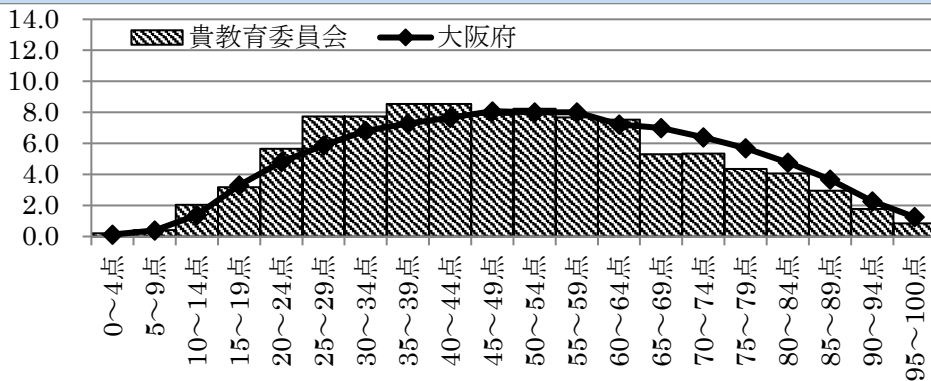
第2学年 社会 A

■平均得点

49.5 点 (東大阪市)

52.6 点 (大阪府)

■得点別分布の割合

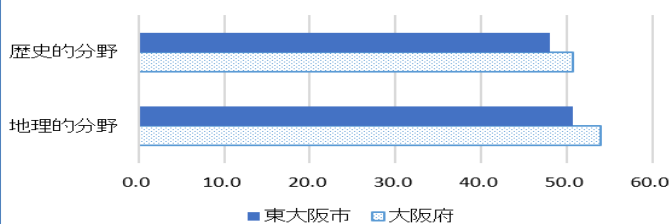


・25～29 点から 60～64 点を中心とした左寄りの台形型となっている。

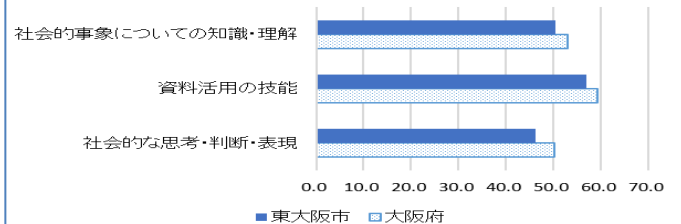
・府の分布と比較して、65 点以上の生徒の割合が小さく、40 点以下の生徒の割合が大きい。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率

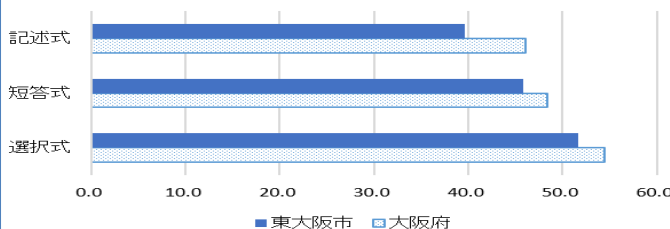
学習指導要領の領域等



評価の観点



問題形式



評価の観点別の得点率では、「資料活用・技能」や「社会的な事象についての知識・理解」に比べ、「社会的な思考・判断・表現」の得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「1999 年に全線が開通した四国地方と中国近畿地方を結ぶ 3 つの道路・鉄道のルート of 総称を書く」設問では、大阪府と比較して正答率が低く（【府】37.4%【市】30.6%）、無解答率（32.6%）も他の設問と比較して最も高い。「社会的な事象についての知識」の定着が課題であり、基礎基本を繰り返し行うことで、知識の定着を図る取り組みが求められる。
- ・「愛知県において、陶磁器の技術を活かしてファインセラミックスを製造している市を選ぶ」設問や「北九州市のエコタウンを説明した文章を読み、適切なことばの組み合わせを選ぶ」設問では、大阪府と比較して正答率が高く、一定の成果が見られる。（【府】23.1%、【市】27.7%）（【府】73.6%【市】78.5%）
- ・「豊臣秀吉の全国統一までにおこったできごとを古い順に並べたときの正しいものを選ぶ」設問では、正答率が他の設問と比べて最も低い（【府】30.0%【市】26.7%）。歴史を因果関係に基づく大きな流れとして理解し、できごとの新旧を判断する力を高める取り組みが求められる。

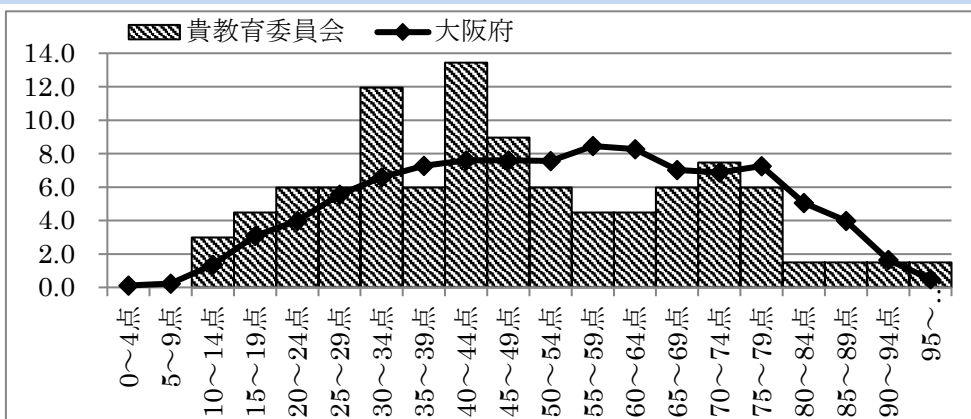
第2学年 社会B

■平均得点

47.9 点（東大阪市）

53.4 点（大阪府）

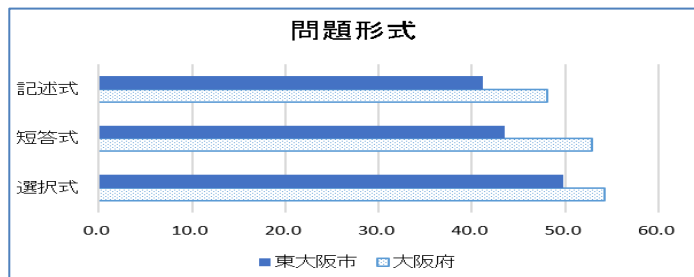
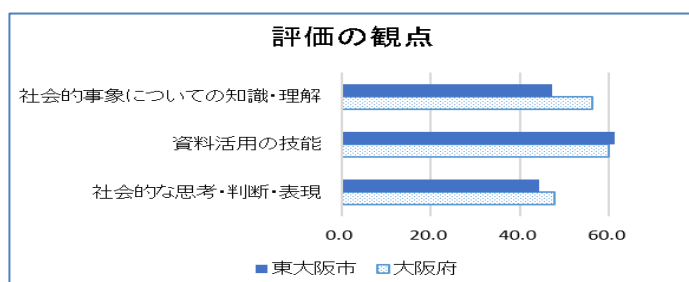
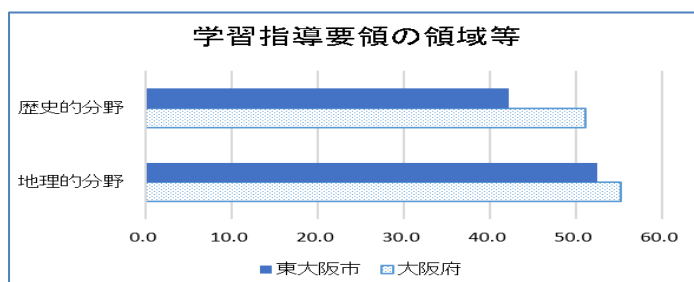
■得点別分布の割合



・府の分布と比較して、80点以上の生徒の割合が少ない。

・府の分布と比較して、30～34点の生徒、40～44点の生徒の割合が極端に高い。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、「資料活用の技能」において、大阪府平均より得点率が高い。「社会的な思考・判断・表現」は他の2観点に比べ得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「図、表から読み取れる内容からわかる、高知県から東京都中央卸売市場へのなすの出荷の特徴について書く」設問では、正答率が低く大阪府との開きも大きく（【市】35.8%【府】44.1%）、無解答率高い。（【市】41.8%【府】23.1%）グラフや表から情報を適切に読み取り、読み取ったことを適切に表現する力を高める取り組みが求められる。
- ・「ほぼ、180度の経線に沿って、陸地にかからないようひかれている線の名前を書く」設問での無解答率が高く、大阪府との開きが大きい。（【市】22.4%【府】14.6%）社会的な事象についての知識」の定着に課題がある。
- ・「江戸時代から明治時代のできごとの中で、示された年代にあてはまるものを2つ選び、年代の古い順に並べたものを選ぶ」設問では、正答率が他の設問と比べて最も低い（【市】7.5%【府】9.0%）。歴史を因果関係に基づく大きな流れとして理解し、できごとの新旧を判断する力を高める取り組みが求められる。

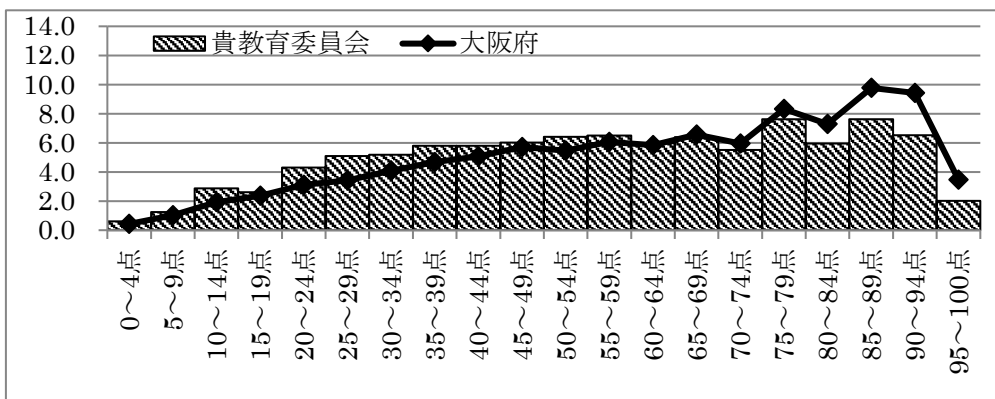
第2学年 数学

■平均得点

56.6 点（東大阪市）

61.8 点（大阪府）

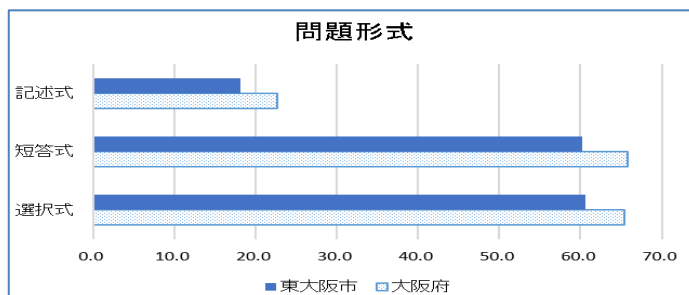
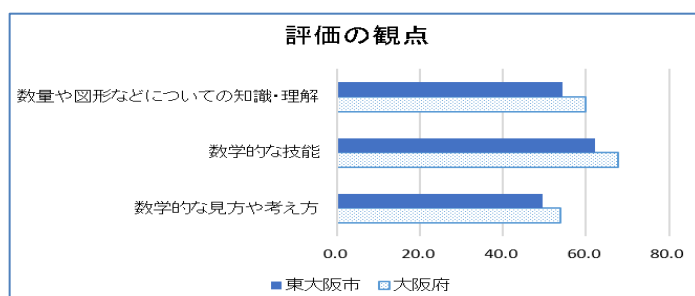
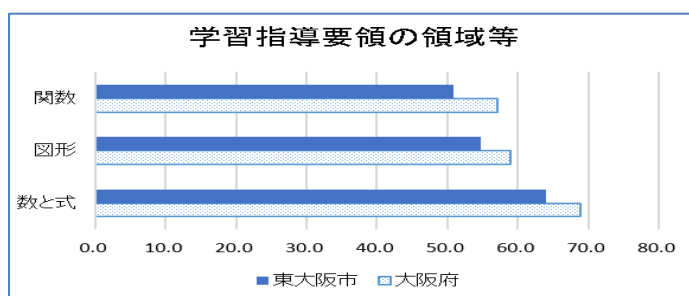
■得点別分布の割合



・75 点～79 点をピークとするやや右よりのなだらかな山型の分布となっている。

・府の分布と比較して 80 点以上の生徒の割合が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



学習指導要領の領域別の得点率では、「数と式」や「図形」に比べ、「関数」の得点率が低く、また大阪府平均との開きも大きい。

■特徴的な傾向と対策

- ・「2 点 $(0, -1)$ 、 $(1, 0)$ を通る一次関数の $2 \leq x \leq 6$ のときの y の変域を求める」設問では、大阪府との正答率の開きが最も大きかった（【市】39.3%【府】49.3%）。与えられた一次関数のグラフから、 x の変域に対応する y の変域を求めることができるかどうかを問う設問であり、3 年生で学習する「関数 $y=ax^2$ 」にもつながる内容である。変域の学習では、グラフを用いて視覚的に捉える活動を取り入れることが有効である。
- ・「グラフから情報を読み取り、考えを数学的に解釈し、問題解決の方法を説明することができるかどうかを問う」設問では、全設問中で最も無解答率が高かった（【市】51.3%【府】45.9%）。数学的な表現を用いて自分の考えを説明できるようになるには、問題解決の方法や手順を説明する場面を設定し、式、表、グラフなどの「用いるもの」とその「用い方」について明らかにする学習活動が有効である。

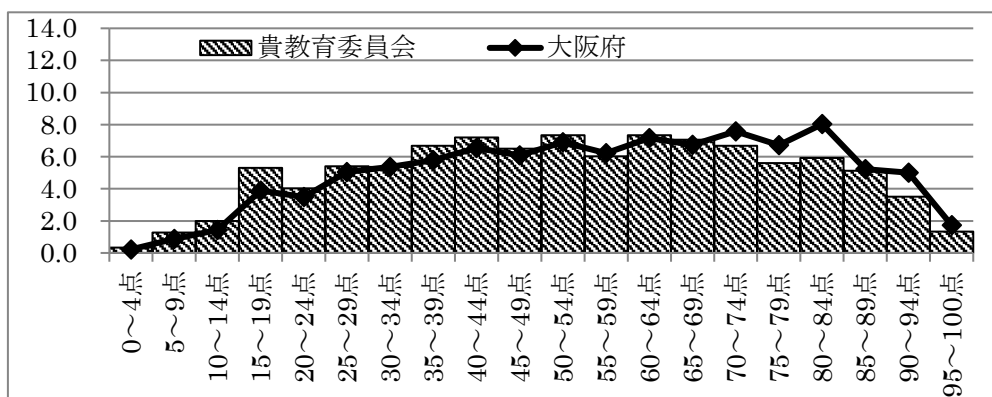
第2学年 理科A

■平均得点

53.4 点（東大阪市）

56.6 点（大阪府）

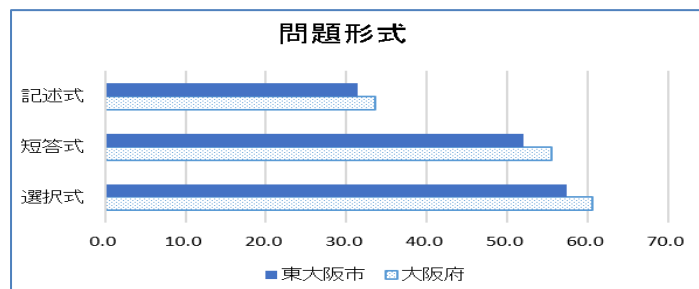
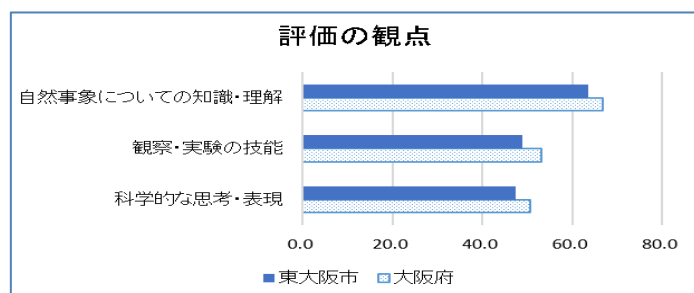
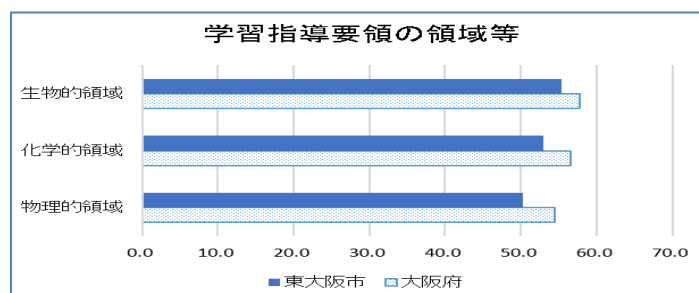
■得点別分布の割合



・得点の分布に関しては、なだらかな山型であるが、中心となる得点分布が見られず、分散傾向が見られる。

・80～84点の分布が大阪府と東大阪市の間で最も大きな開きとなっている。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別では、「自然事象についての知識・理解」に比べ、「観察・実験の技能」や「科学的な思考・表現」の得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「炭酸水素ナトリウムの質量と発生した気体の質量の関係を表すグラフをかく」設問は、全設問中で、大阪府との正答率の開きが最も大きかった（【市】36.0%【府】42.5%【差】6.5%）。実験結果をもとに、グラフをかくことができるかどうかを問う設問であり、観察・実験の結果を的確にまとめていく力が求められる。観察・実験を行うだけでなく、その結果を表やグラフにまとめていく活動の機会を授業で多く取り入れていくことが必要となる。
- ・「反応する炭酸水素ナトリウムとうすい塩酸の質量の比から、再び気体が発生した理由を説明する」設問は、全設問中で大阪府との無答率の開きが最も大きかった（【市】43.6%【府】39.8%【差】3.8%）。実験結果を基に、考えを文章で表現することに課題が見られる。授業において、自分の考えを他者に伝える機会やノートに記述する機会を多く取り入れていくことが必要となる。

第2学年

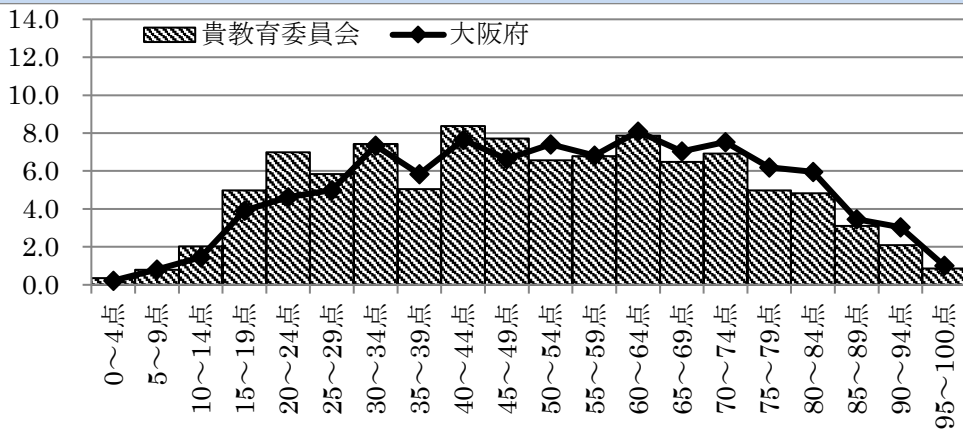
理科B

■平均得点

50.3点（東大阪市）

53.4点（大阪府）

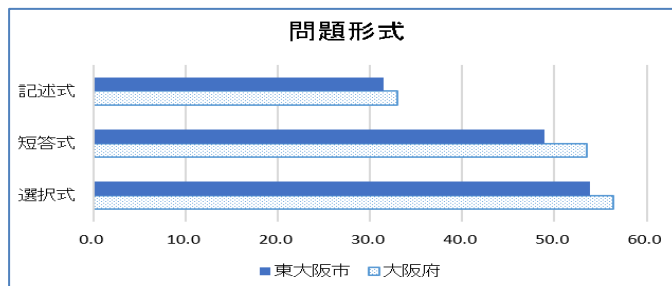
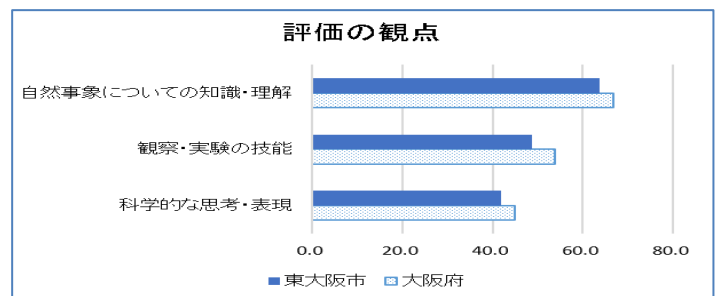
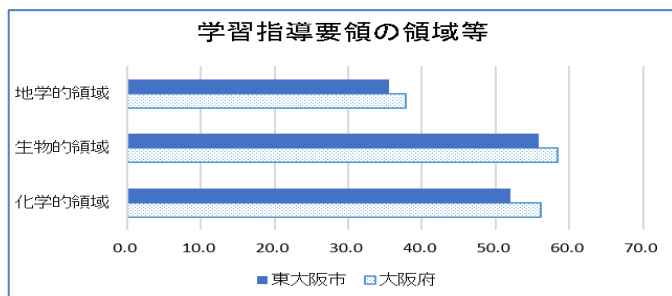
■得点別分布の割合



・得点の分布に関しては、なだらかな山型であるが、中心となる得点分布が見られず、分散傾向が見られる。

・20～24点の分布が大阪府と東大阪市の間で最も大きな開きとなっている。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別では、「自然事象についての知識・理解」に比べ、「観察・実験の技能」や「科学的な思考・表現」の得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「炭酸水素ナトリウムの質量と発生した気体の質量の関係を表すグラフをかく」設問は、全設問中で、大阪府との正答率の開きが最も大きかった（【市】35.8%【府】43.4%【差】7.6%）。実験結果をもとに、グラフをかくことができるかどうかを問う設問であり、観察・実験の結果を的確にまとめていく力が求められる。観察・実験を行うだけでなく、その結果を表やグラフにまとめていく活動の機会を授業で多く取り入れていくことが必要となる。
- ・「雲のでき方」について考える大設問は、全大設問中で、最も正答率が低かった。（【市】約37.5%）。この大設問は、『科学的な知識や概念の理解』→『実験結果の分析』→『日常生活での活用』という流れになっている。学んだ知識が日常生活でどのように活かされているか、実感できる授業の必要性が求められている。

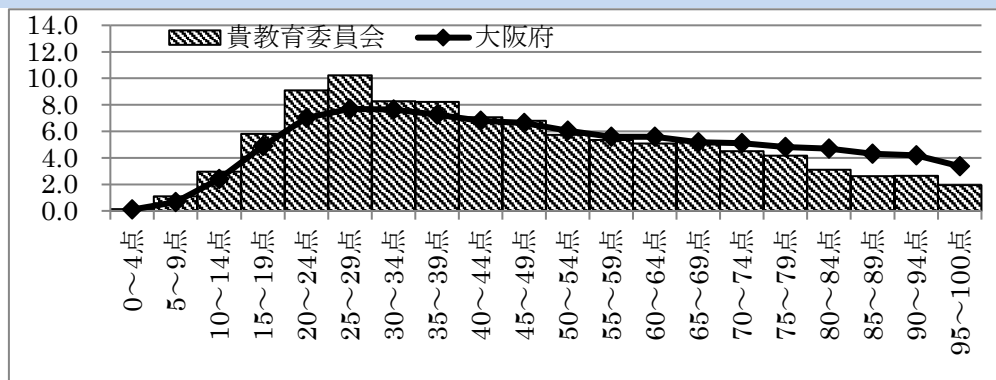
第2学年 英語

■平均得点

46.3 点（東大阪市）

51.3 点（大阪府）

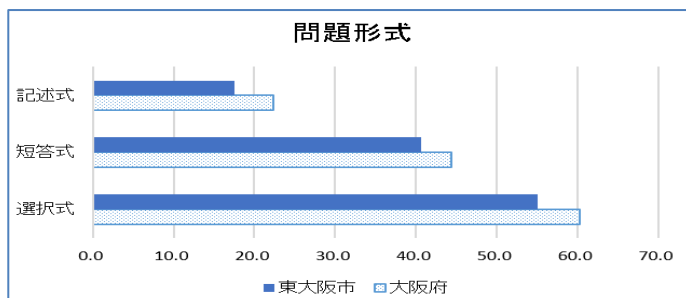
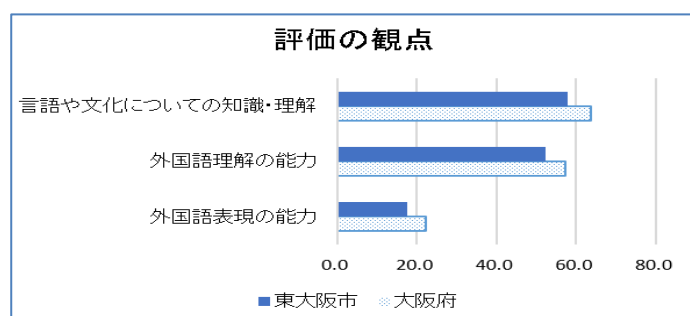
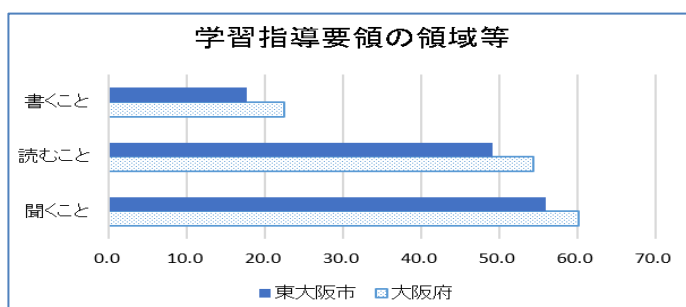
■得点別分布の割合



・25点～29点をピークとする分布となっている。

・府との分布と比較して、70点以上の生徒の割合が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、「言語や文化についての知識・理解」や「外国語理解の能力」に比べ、「外国語表現の能力」の得点率が低い。

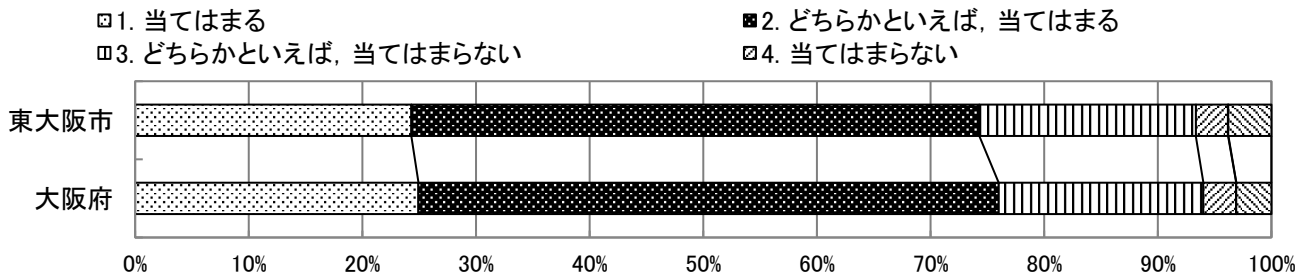
■特徴的な傾向と対策

- ・適切な接続詞（when）を選ぶ問題において府平均正答率 55.3% に対し市平均正答率 43.4% と最も差が大きい。疑問詞 when と接続詞 when の用法や基本的な文構造が十分に理解できていないと考えられる。基本文の定着をスモールトークなどを用いてスパイラルに学習できるように授業づくりする必要がある。
- ・会話の流れを理解し指定された語数で適切な英語を入れて会話を完成させることができる力が求められる問題の無解答率において、府との開きが大きい（【市】 32.5% 【府】 26.7%）。場面や状況を文脈からつかみ表現するという読むこと・書くことの技能が求められる。日常的にインプット（聞く・読む）とアウトプット（話す・書く）の技能の統合が必要となる。

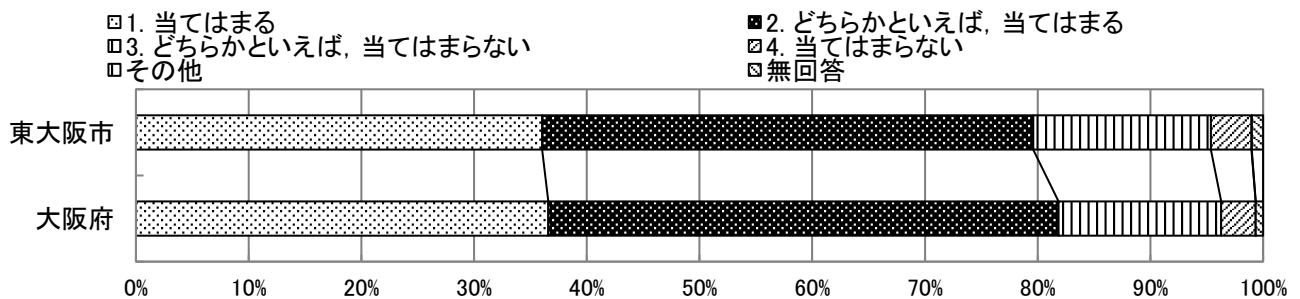
アンケート結果

■中学校1年生

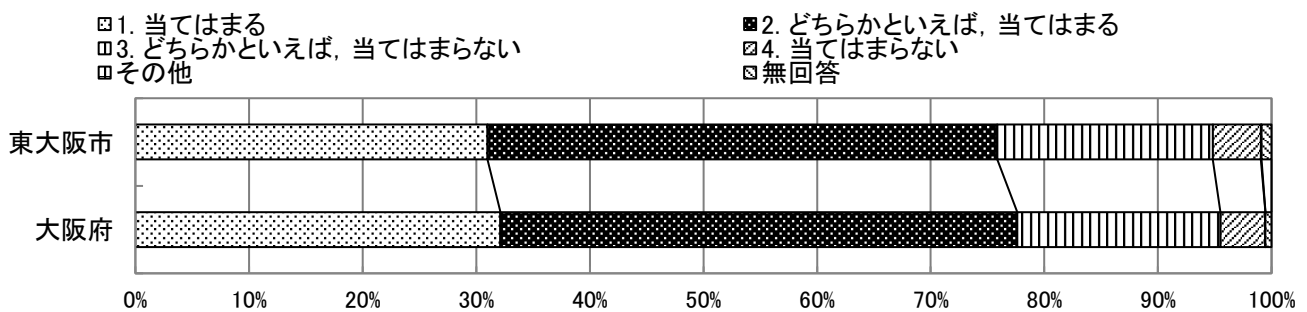
【国語】国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。



【数学】数学の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている。

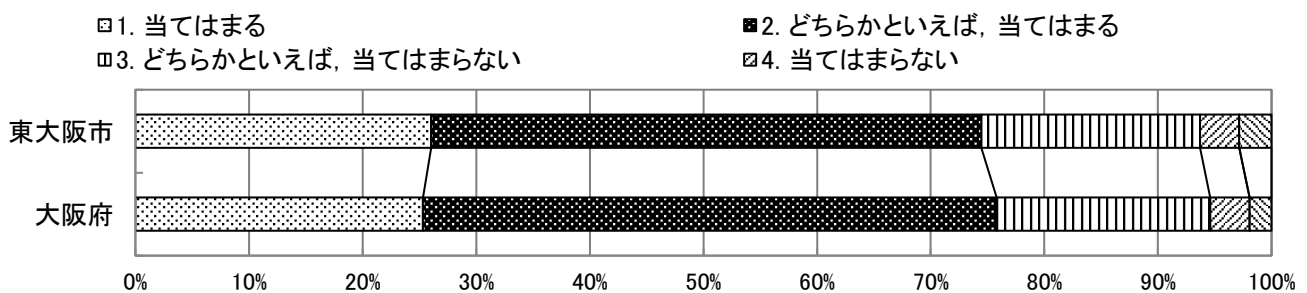


【英語】英語の授業で自分の考えを表現するとき、相手に伝わるよう工夫して話したり書いたりしている。

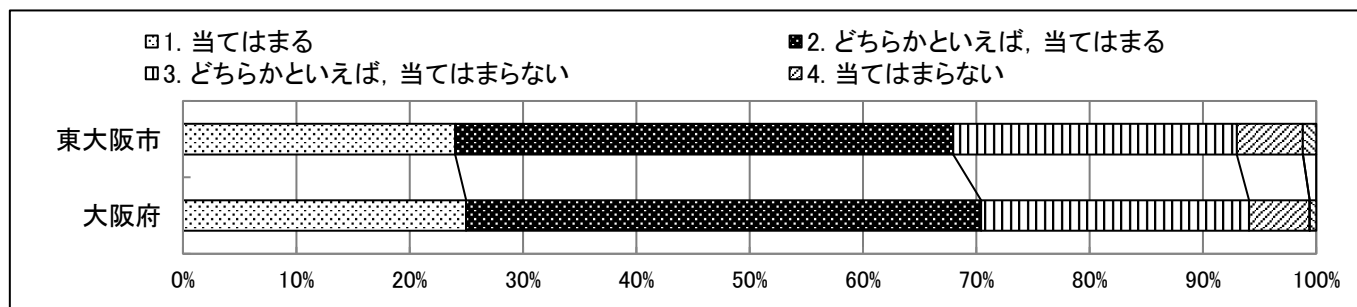


■中学校2年生

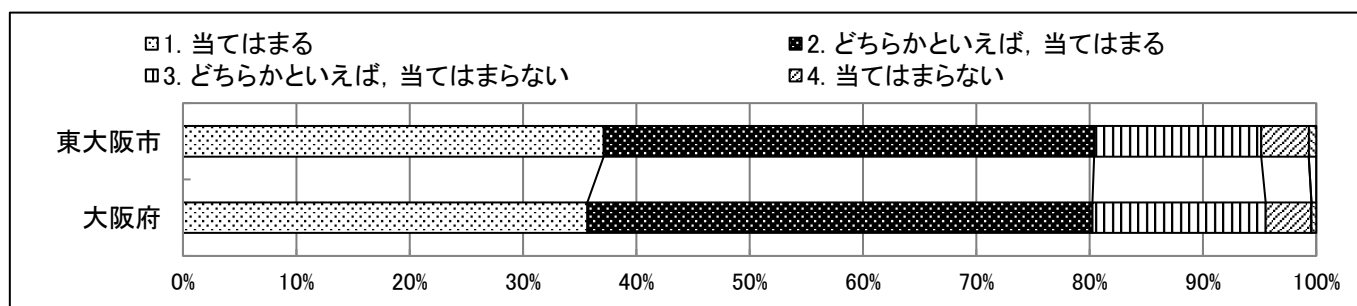
【国語】国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。



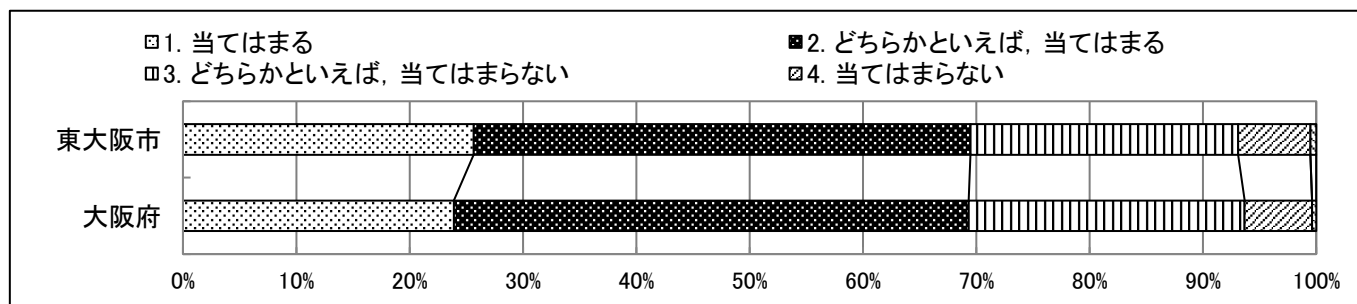
【社会】社会の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。



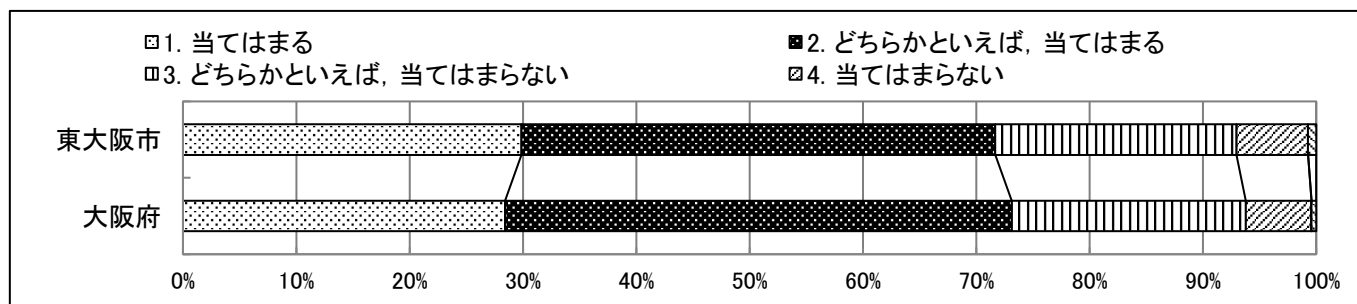
【数学】数学の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている。



【理科】理科の授業で自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている。



【英語】英語の授業で自分の考えを表現するとき、相手に伝わるよう工夫して話したり書いたりしている。



■特徴的な傾向と対策

・各学年、各アンケート項目において、肯定的な回答の割合は、昨年度に引き続き、大阪府よりも低い状況である。東大阪市の学力における重点課題である「自分の考えを記述したり、説明したりする力」の育成を図るため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組み、組織的な推進を進めていくことが大切である。

